

## 女性にとっての「大義」とは

——レイ・ストレイチーの『大義』とヴァージニア・ウルフの『3ギニー』——

杉 村 使 乃

2005年度より敬和学園大学では、「表象に見る第2次世界大戦下の女性の戦争協力とジェンダー平等に関する国際比較」（代表者：加納実紀代）という研究課題で共同研究が進められている。この研究に参加することは、もともと文学が専門の筆者にとって新しい試み、また新しい試練ではあったが、同時に専門の文学研究にも新しい視野を開いてくれた。共同研究の方では、主に媒体を雑誌に絞り、そこに見られる女性表象について分析をすすめている。またそれに先立ち、特に19世紀末から第一次世界大戦、そして第二次世界大戦の間に見られた若い女性を対象とした「啓蒙運動」、また女性の労働と「市民」意識の芽生えに着目し、調査、報告を行った。<sup>(1)</sup> こうした作業は、20世紀初頭のイギリス文学研究にも新しいコンテクストを与えてくれるものであった。

これまで、第一次・第二次世界大戦への文学的反応は、英文学史では、回顧的な「喪失感」、「批判」、「平和主義的」な視点が強調されてきたと思われる。「ポスト・コロニアル」研究が進む中、19世紀後半の文化、また第一次世界大戦（Great War）を対象にして、イギリスにおける「帝国主義」が再考されてきた。日本では武藤浩史編集の『愛と戦いのイギリス文化1900－1950』、また2007年の日本英文学会大会におけるシンポジウムで、第二次世界大戦期をも視野に入れた「戦争」と「文化」の研究が活発になりつつある。<sup>(2)</sup> 今後、筆者は、第一次、第二次世界大戦前後の期間をターゲットとし、戦時下の文化、そして文化が担うジェンダー形成という研究テーマに貢献できたらと考えている。二つの大戦中に「国家」を支えるために「戦時労働」（war work）に就いていた多くの女性たち、「平和主義」だけではなく、「愛国主義」でもあった女性像について考え、「戦争」と「文学」を多角的にとらえることは、現在、文学・文化研究で求められる「ポスト・コロニアル」な思考に不可欠であると考えている。

ここで取り上げるレイ・ストレイチーの『大義』（*The Cause* 1929）は、この期間の女性表象を考える上で重要な資料を提供してくれる。著書は、同時代の参政権獲得運動に至るまでの道のり、また参政権を求める「大義」とは

何であったかを、18世紀末までさかのぼり、様々な人びとの運動の記録を通して論じていく。<sup>(3)</sup> ストレイチャーによると、参政権、あるいは女性が「市民」としての地位を獲得する上で、第一次世界大戦中の女性の戦時労働が大きな役割を果たしたことが伺われる。戦争は女性の歴史に何をもたらしたのか。ストレイチャーの著書では女性の地位向上に大きな役割を果たし、女性を抑圧していた「グランディ夫人」(Mrs Grundy)を死にいたらしめたものとして女性の「戦時労働」を肯定的にとらえているようだ。<sup>(4)</sup>

ストレイチャーの著書の10年後に書かれたヴァージニア・ウルフの『3ギニー』は、戦争と女性を考える上で貴重な提言を行っている著書として広く知られている。このエッセイは「戦争を防ぐために何ができるか」という、ある平和団体を運営する紳士の問いかけ、そしてその団体への加入、寄付の呼びかけに対して、「わたし」(I)が答える形式で書かれている。「わたし」は、長い歴史の中で男性が女性に何らかの意見を求めるとはこれまでなかったことであると、ややアイロニカルに、そしてじつくりと、この紳士の提案について考察する。「わたし」の手元には、この紳士の手紙の他にも二通、やはり資金援助を求める文書が届いていた。一方は女子用コレッジの改修をすすめる団体、もう一方は女性たちの就職を支援する団体(National Society for Women)である。結局、それぞれの団体に1ギニーずつ寄付するという決断に至るまでの思索がこのエッセイの3部のそれぞれを形作っていく。<sup>(5)</sup> 一見、関連が薄いように見える、「戦争と平和」、そして「教育と職業」という2つのテーマであるが、それぞれが女性性、男性性と深くつながり、戦争を引き起こす社会を作っていることが様々な文献や統計に基づいて論じられていく。

第一次世界大戦後、女性たちは参政権を手に入れるとともに、「市民」(citizen)として行動することを自ら意識し、そして期待されるようになっていった。教育と労働の現場における女性の状況と変化を考える上で、ウルフがストレイチャーの研究を大いに参考にしたことが伺われる。第二次世界大戦が目の前にせまっているように見えるイギリスで、女性が手に入れた社会的、経済的地位を、ウルフがどのように見ているかが大変、興味深い。ここではこの二つの著書を比較し、女性の社会進出と「戦争」の関連について考えてゆく。

## 1 レイ・ストレイチャーの『大義』における「戦時労働」

ストレイチャーの『大義』は、イギリスの女性運動の祖といわれるメアリ・ウルストンクラフト(Mary Wollstonecraft 1759-1787)の『女性の権利の擁護』

(*A Vindication of the Rights of Woman* 1792) から始まり、第一次世界大戦終了後まで、女性の権利に関する運動がどのように繰り広げられてきたか、そして関連する法がどのように見直されてきたかを広く伝える、イギリスの女性運動の通史と言える文献である。ストレイチー自身はアメリカ人であるが、ケンブリッジ、ニューナム・コレッジの出身者で、自身も女性参政権運動に深く関与していた。そしてこの著書は、歴史的な文献や統計にあたるだけではなく、われわれがイギリスの女性参政権運動で連想する面々——ミリセント・フォーセット (Millicent Fawcett 1847-1929) やパンクハースト母子 (Emmeline Pankhurst, 1858-1928・Christabel Pankhurst, 1880-1958)——に直接、聞き取り調査をして書かれた。<sup>(6)</sup> 参政権運動に至るまでに、どのような「大義・原因」(cause)があったのかを18世紀半ばの家庭や夫婦の不平等な状況に遡り論じている。かつて、女性の財産、収入は全て夫のものであり、身体的な自由、意識・良心でさえ夫の手中にあった。また1857年まで事実上、離婚は不可能であった。女性が基本的な人権、経済的な地位、自分と自分の子どもの衛生、健康を求めたとき、目的は参政権獲得へと向かっていった。

19世紀後半から女性運動は活発になっていくが、特に労働に関して言えば、第一次世界大戦は一つのターニング・ポイントであった。その60年前、Harriet Martineauは自伝の中で、女性は社会に貢献できる仕事に就く能力を有していることを述べ、様々な試みがその間に行われてきたが、皮肉なことに戦争によって、目に見える形でそのことを証明できる機会が与えられたのである。<sup>(7)</sup> 戦時労働で活躍する女性を目にした男性たちは、人間が一般的に持つ徳や能力を女性もまた有していることに、自分たちが長い間、盲目であったことに気づく。戦時における女性の「英雄的行為と勇気」("the heroism and the courage of women") が、女性運動では動かなかった人々を動かし、まさに「戦争が彼らの目を開いてくれた」のである。(Strachey, 348-49)

第一次世界大戦の勃発により、The National Union of Women's Suffrage Societies (以下NUWSS) による運動は一次中断した。過激な運動を展開していたサフラジェットたちも特赦を受け出獄する。そしてそのエネルギーは、戦争というもう一つの「大義」へと向けられる。「私たちの主張が通ろうと、通るまいと、私たちが『市民』(citizenship) にふさわしいところを見せてやりましょう」、このフォーセット夫人のリーダーシップに周りにも従った。(Strachey:1928, 337-38) 女性たちが引き起こした「1914年8月のあの驚くべき[女性たちの]噴出」とウルフが形容する現象がおきたのである。(Three Guineas, 207) <sup>(8)</sup> 「少しでも何かをしたい」という女性たちが救済事務所(the

Local Relief Committees)、陸軍省 (the War Office)、赤十字 (the Red Cross) の各施設に駆けつけた。最初の一ヶ月はほとんど無視されていたが、やがて The Voluntary Aid Detachments (V.A.D.)を中心として活動を始めた。看護婦の派遣だけでなく、医療器具、救急車 (車両提供、運転) も含め、多くの女性たちが奉仕に携わった。8月以降、ベルギーからの大量の難民が到着すると仕事は格段に増え、食物、医療、宿泊所を提供した。(Strachey, 338-39) (9)

これらの看護の仕事は、比較的裕福な (well-to-do) な女性たちが携わった仕事である。労働者階級の女性たちの状況はどうであっただろうか。戦争の初期は、取引の停止により閉鎖される工場があり、100万人の女性たちが失業に追い込まれた。しかし1915年に入ると、大勢の男性が兵士として前線に送り込まれたため、女性の労働が必要とされた。

最初に問題になった点は、女性たちのほとんどは工場労働の未経験者であったことである。London Society for Women's SuffrageやThe Women's Trade Unionsは、訓練コースやワークショップを開き、女性労働者の訓練にあたった。かつては家事労働、店員として努めていた女性たちが、道具を使いこなし、工場勤務できるようになっていった。次に問題になった点は、女性を雇用することをためらう工場側、そして男性労働者の反対である。国家の緊急時に際し、すでに男性の労働組合は、不本意な労働条件を強いられ、低賃金で済む多くの非熟練工 (semi-skilled) が雇用されることに甘んじなければならなかった。そこで更に何の訓練もない女性労働者が入ることに非常に批判的であった。また、こうした女性たちが十分「使いものになる」と判断された場合、戦後の自分たちの就職、労働条件はどうなるのかと懸念していた。1915年にはすでに「ダイリューション」(dilution、代替)は始まっていたが、男性の組合側は依然として女性導入に抵抗し、女性たちと一緒に働く、また女性たちに工場労働に必要な技術を伝えることに抵抗していた。<sup>(10)</sup> そこで、工場主側は、一定の賃金、また、「代替」で入れられた労働者たち (dilutees) には性別に関わらず、同一の賃金 (piece-work rates) を支払うことを保障し、一方、政府は労働者に戦後は「戦前の慣習」("pre-war practice") に戻すことを約束することになった。ロイド・ジョージ首相は、工場労働 (munition work) へと女性たちを勧誘し、すでに反政府的姿勢を崩したパンクハースト夫人らによって、女性労働者たちは組織作られていった。

軍事工場へと連なっていく、すばらしく見事な女性たちの列がパンクハースト夫人によって、ロイド・ジョージのために組織立てられた。何

千人というボランティアたちが戦時奉仕への呼びかけに応えたのである。しかしながら、それは恐ろしく未熟なものであった。訓練所も、工場も、雇用に関する施設 (recruiting centres) も何の準備も成されていなかったのだ。国からの呼びかけがあっても、ほとんど雇用の「空き」は無かったのである。憤ましい労働者たちは、貯金を使ってロンドンまで長旅をした挙句、仕事を手にすることができず、どうにもならないで保護されるものもいた。しかしそれで挫けるものはいなかった。戦時であったし、状況は悪くなるに違いなかった。何らかの職が提示されると何千という申し込みが殺到した。10代の若い女性たちと同じくらい熱心に年配の女性たちもやってきた。結局、50万人くらいの女性たちが職につき、やる気のあるボランティアが不足することはなかった。長時間労働、夜勤、宿泊施設、食糧不足、彼女たちのやる気を挫くものは何もなく。何か職に就ければ、前線の男性たちの手助けになっているのだと感じられる限り、何も問題にはならなかった。造船、航空機・兵器製造、化学工業、ロープ・ゴム製造、鉄鋼業の分野で、彼女たちは元気に、自分たちのできる「少しばかりのことをした」 ("did their bit") のである。(Strachey, 343)

英国の官庁街 (Whitehall) にも新しい仕事がどんどん生まれ、女性たちが動員されたが、公務員職においても組合 (The Civil Service Trade Unions) は、女性が責任のある職、またよい給与が支払われる職につくことに反対であった。しかしながら、1915年の夏から、女性が男性に代わって入れ替わり働く数は順調に増え、1916年には、一般的に女性の仕事が認められるようになっていたようだ。ストレイチーは、「新聞も熱狂的に女性の仕事を賛美し、女性たちは、降って沸いたような自分たちの人気と、高い収入、興味深い新しい仕事、自分の能力が活用されること、自分たちの能力を自由に使う機会、こうしたものを知り始めていた」と記している。(Strachey, 344-45)

女性の雇用が拡大する中、軍隊にも前線により多くの男性を送るため、補助的な業務を行う女性を直接雇用することが検討された。1915年7月、The Women's Legionが結成され、陸軍省の管轄下に入り、1917年始めには、最初の正式の女性部隊、The Women's Army Auxiliary Corpsが登場する。<sup>(11)</sup> 農業の分野でも、やはり最初、女性労働者は信用されていなかったが、やがて労働力の需要が高まりThe Land Armyとして活躍した。<sup>(12)</sup> その他、大工、軍隊の娯楽施設、駅の売店、廃品回収、運河の船舶航行、慈善活動など幅広い分野で女性たちは動員された。(Strachey, 346-47) 戦争により女性運動はそ

れまでになく広く支持されるようになった。また戦争は、一時的ではあるがそれまでの在宅の"women's work"では得られなかった経済的余裕を女性たちにもたらした。戦時下で食料不足であったにも関わらず、工場で働く女性労働者たちはそれまでよりもよい食事にありつき、既婚女性は独立した収入を得ることができたおかげで、子どもたちにより多くより良い食料と衣料を与えることができたらしい。(Strachey, 349) この点では、戦時労働に就くことと、それまでの女性運動の「大義」は何ら矛盾することはなかったのかもしれない。

## 2 第一次世界大戦の「戦時労働」がもたらしたもの

アーサー・マーウィックによると1901年から1931年にかけてイングランドとウェールズにおける女性就業者の数は以下のように推移している。

1901年	4,171,751人	(総女性総数16,799,230人の24.9%、総人口32,527,843人)
1911年	4,830,734人	(女性総数18,624,884人の25.9%、総人口36,070,492人)
1921年	5,065,332人	(女性総数19,811,460人の25.6%、総人口37,886,699人)
1931年	5,606,043人	(女性総数20,819,367人の26.9%、総人口39,952,377人)

(Marwick, 166)

女性労働者の全体に対する割合には大きな変化は見られないが、「戦時労働」は労働の中身に大きな変化をもたらしたようだ。

戦後、NUWSSは、The National Union of Societies for Equal Citizenshipと名称を変更し、女性の地位と権利の向上とい「フェミニスト」的目的を維持しつつも、さらに女性を「市民」として教育すること("to educate women in the duties of citizenship")を目的にすることによって、社会におけるこの協会の重みを増した。(Strachey, 369-70) 1918年に置いて、不平等な離婚、遺産贈与、国籍の扱い、選挙権、親権、道德規範、雇用の機会、給与の不平等など、さまざまな面で不平等が見られた。その中でも、ストレイチーは、1918年において最も重要だったのは女性の経済的地位の変化であると述べている。戦争がもたらした一時的な女性の経済的地位の向上は急に停止し、1919年の春には動員解除(demobilization)が急速に進められ、戦場から男

性が帰還すると、女性は解雇された。女性は家庭にもどることが奨励されたが、実際は戦争によって「余った女性」(surplus women)の数は増加し、3人に1人は自活の必要があった。<sup>(13)</sup> 戦時中には、「国家のヒロイン、救済者」(heroines and the saviours of their country)と持てはやされていた女性たちが、今や「寄生生活者」(parasites)、「スト抜け」(blacklegs)、そして「貝のように地位にしがみつくもの」(limpets)と同僚の男性労働者から誹謗中傷され、雇用者たちは、かつて彼女たちを雇おうとしたのと同じくらいの熱心さで今度は職場からの追い出しにかかった。(Strachey, 370-71)

しかしながら「戦時労働」は、女性労働者の労働における嗜好に大きな変化をもたらした。戦後、質の良い「家事労働」(domestic service)の確保が困難になったのは、工場で働く若い女性たち(munition girls)は、戦時中に、独立した生活を営むことができる良い給料に味をしめ、甘やかされたからだの一部は批判している。もはや一日14時間という「家事労働」はほとんど奴隷に近いものとして考えられていた。更に、早いうちから工場労働に出ることによって若い女性たちは、料理、裁縫、衛生などの必要な知識と訓練を受ける機会がないため、たとえ雇われてもすぐに解雇されるのが落ちであった。この状況を改善するために1919年、家事労働の訓練センターが設立された。(Strachey, 373-76)

このように「戦時労働」は数というよりも職種の上で女性の労働に大きな変化をもたらしていた。また階級によっても差異があったようだ。工場で働く女性たち(industrial women)は戦前とほぼ同じ地位に追いやられてしまったが、男性の強い組合がない職場では、能力が認められ、その地位を確保し続ける女性たちもいた。銀行、商社、政府官公庁、その他の会社では、女性たちが様々な労働を継続したのである。ストレイチーは、こうしたことを女性の経済的地位の発展を考えて、「進歩」ととらえている。(Strachey, 373)

1919年の性別による職業資格剥奪廃止法(The Sex Disqualification Removal Act)の施行は、女性の労働運動の歴史において、大きな一步であったと思われる。その後、公認会計事務所、ロイヤル・ソサエティ、そして国会議員も女性を受け入れるようになった。そして1925年、全ての官庁に関して、女性にも男性と同様の試験が初めて行われ、大学卒の3人の女性が「行政管理実習生」(administrative cadets)として採用された。

しかしながら、こうした「ホワイト・カラー」の女性たちに対して、第一次世界大戦後、女性労働者に向けられたものと同様の非難があったことを当時の新聞を引用しウルフは明らかにしている

「私は、そちらの特派員が……女性はあまりにも多くの自由 (liberty) 持ちすぎているという点で、この議論を正しく要約していると思います。この、いわゆる自由は戦争とともにやってきたようです。戦時中、女性たちはそれまで知らなかった責任を与えられました。当時、彼女たちはすばらしい奉仕をしました。不幸にも、彼女たちはその働きの価値を不相応に称賛され、甘やかされたのだ。

(*Daily Telegraph*, 22 January, 1936. Quoted in *The Three Guineas*, 226)

官庁、郵便局、保険会社、銀行、そして宗教職にも入り込んできた女性は「家事労働」に配置換えすべきである。そして職にありつけない男性に職業を与えるべきである。そうすれば彼らは、今や近づきがたくなってしまった女性たちと結婚し、女性たちをいるべき「真の場所」(すなわち「家庭」)へと向かわせることにつながるのだ、と主張する記事をウルフは引用している。(Three Guineas, 226-27) また、上級職については依然としてオックスフォード、ケンブリッジで教育を受けた男性たちが中心であった。

『3ギニー』でも、1919年の法令は、それまでとは違った影響力——女性という「性」に頼ることなく発揮できる、独立した収入という影響力——を女性に与えたものとして評価されている。それによって自分を養う男性たちの顔色を伺うことなく、自分が「大義」と思うものに資金を援助することもできるようになったのだ。

ウルフは女性の「労働」に関して経済的、精神的自立を促すという点では評価しているが、闇雲に機会均等を受け入れることには批判的であった。1929年に出版されたウルフの『自分だけの部屋』の一説では、「女性と小説」という演題について思索しながら徘徊する「わたし」が、ある石炭を運搬する男性と、子守をする女性をみて、家庭生活の営みの中にある男性と女性の職業の役割分担、労働の価値について考える。そして通り過ぎる兵士たちを横目に、女性の労働機会の均等がもたらすものについて考える。

百年もたてば、きっとすっかり変わってしまうでしょう。その上、百年もたてば、女性は被保護者 (the protected sex) ではなくなくなっているでしょう……理屈の上から言っても、女性は、かつて許されていなかったあらゆる活動や仕事をするようになるでしょう。子守りの女性は[男性のように]石炭を運搬し、女性店員は機関車を運転するようになるでしょう。女性が被保護者であったときに見られた事実に基づく一切の仮定はなくなっているでしょう……女性から保護を取り除き、男性と同じ



仕事や活動をさせ、彼女たちを兵士、船乗り、鉄道の運転手、港湾労働者にしてごらんなさい。そうすれば、女性は男性よりずっと若くして、ずっと早くに死んでしまい、「飛行機を見たよ」とかつて言ったように「今日は女性を見たよ」と言うようになるでしょう。女性であることが保護される義務で無くなったときは、どんなことが起こるやもしれない…… (*A Room of One's Own*, 52) <sup>(14)</sup>

実際に、第一次世界大戦の「戦時労働」では、命をかけた活躍によって「国家のヒロイン、救済者」と称えられたものたちもいた。当初、国内の赤十字では、女性の医師を登用することを拒否していたので、彼女たちの何人かは同盟国のフランスで勤務した。そこでの実績が認められ、1915年には、陸軍省も方針を変え、ロンドンにある軍隊の付属病院での勤務を依頼されるようになる。Dr Elsie InglisはN.U.W.S.S.の援助を受け、ベルギー人、フランス人、ロシア人、セルビア人部隊用に医療機関を設置した。こうした医療機関で自身も癌に侵されながら勤めたDr Inglis、そして1915年に打たれて亡くなったEdith Cavellは、後に「英雄視」される。(Strachey, 347) 活躍の場を与え始められた女性たちに「命」をかけて「英雄」になることについて、批判的に考えることは難しかったと思われる。

### 3 「事実」(facts) の見方の転換：『3ギニー』

ストレイチーの女性運動に関する克明な記録は、第一次世界大戦の終わりまでを網羅し、女性の戦時労働がもたらした結果を機会均等、権利拡大に貢献したものとして評価している。その10年後に書かれた『3ギニー』は、戦争という事実を踏まえて、女性の「戦時労働」をより批判的にとらえているようだ。どんな「卑しい」職業にでも殺到した女性たちの「あの驚くべき噴出」の背後には「結婚」を人生の目的に設定し、女性を私的領域に閉じ込める教育に関する不満があったようだ。そのため彼女たちが持てる全ての能力と魅力を使い、結局は「戦うことは英雄的であり、戦傷者は女性のあらゆる介護と称賛に値する」ことを表明してしまった。そして結果的に「私たちのすばらしい帝国」(our splendid Empire)、「私たちのすばらしい戦争」(our splendid war)を自分の解放のために必要としてしまったのではないかと考えられている。(Three Guineas, 207-8)

「平和」、誰もがその価値を信じて疑わないと思われるこの「平和」を維持するためにある紳士が提案したことに対して、『3ギニー』の「わたし」は即座に応じることにためらっている。「わたし」は、自分とこの紳士が、こ

の階級が混交する時代 (hybrid age) にあって、ライフスタイルにおいても、知的においても、そして自活している点についても共通していると認識している。しかしながら、「わたし」は、自分とその紳士の間には、超えがたい「裂け目」 ("a precipice, a gulf so deeply cut between us") がある。 (*Three Guineas*, 154-55)

ウルフは、このエッセイの語り手「わたし」の階級について、自身を反映した「高等教育を受けた男性の娘たち」 ("the daughters of educated men") とはっきり、規定している。ウルフによる詳細な原注はそれだけでもかなり読み応えのあるものであるが、そこではこの階級の設定に関して、高等教育を受けた父親を持つ息子たちは「有産階級」 (bourgeois) に当てはまるとしても、有産階級の二つの主要な特徴である資本と環境に恵まれない、兄弟とは大きな格差がある娘たちを「有産階級」と称するのは著しい誤りであると述べている。 (*Three Guineas*, 369) ストレイチャーが詳細にその歴史をたどったように、女性が自分の財産を持ち、教育と職業の機会を与えられるようになるまではかなりの年月がかかったのだ。「アーサー教育基金」 (Arthur's Education Fund) は、オックスフォード・ケンブリッジを始めとして、600年以上の長きに渡る男性の教育機関とそこでの教育活動を支えてきた。後に冒険家として名を成し、アフリカに関する旅行記を通して有名になった Mary Kingsley (1862-1900) でさえ、「ドイツ語」の家庭教師を雇ってもらったのが精一杯のことであった。しかし兄弟たちは、大学教育そのもののみならず、友人との付き合い、教養のための娯楽、旅行にと資金を潤沢に使ってきた。「教育基金」は高等教育を受けた男性たちの労働だけによるものではなく、彼らの元へ嫁いだ女性たちの財産によっても支えられていた。既婚女性の財産は男性の所有となり、その用途も男性に託されていたからである。

「わたし」は「いかに戦争を防ぐことができるか」という問いに、この「教育」という問題が大きく関与していることを明らかにする。そして「わたし」は、自分は、教育を受け専門職についている男性に対して問いを発しているのだということを度々読者に思い起こさせるため、"Sir" という呼びかけをところどころに入れている。このエッセイで多くの場合、「わたしたち」 (we) は、「わたし」 (I) を含む、「教育を受けた男性の娘たち」を指す。しかし、同じ「階級」ではあっても、"Sir"の属する「あなた/あなた方」 (you) と意見を同じくすることに大きなためらいがうかがわれる。女性と男性の歴史の中にある大きな裂け目が、「わたし」の目の前にある事実 (facts)、例えば、オックスフォード・ケンブリッジの大学街やそこでの生活、官公庁へとつらなる人の波、新聞の記事、年鑑のデータなどが、"Sir"の目とは、全く違

うものに見えるのではないかと懷疑の念を示している。

「わたし」は、あるいはウルフは、あまりにも容易に「私たち女性」という言葉を使うので、性に関して本質主義的すぎるように受け取られる面もあるかもしれないが、その「性」が歴史や伝統によって構築されたものであり、またそれ故に「あなた方、男性」とは同じ事実に関しても感じ方が違うのだと論じられている。「教育」と「財産」(property)という事実(facts)を取り上げても、一方は恵まれている性であり、他方は剥奪されてきた性である。「男性」と「女性」は、その経済的格差により、別々の「階級」であることは、『自分だけの部屋』でも触れられていることであるが、『3ギニー』ではより明確に、この「階級差」がものの見方にも影響を与えることが示されている。

教育という事実をとり上げてみましょう。あなた方の階級はパブリック・スクールと大学とで500~600年間も教育を受けてきましたが、私たち女性は60年に過ぎません。財産という事実も取り上げてみましょう。あなた方の階級は結婚によってではなく、生まれつきの権利によって、實際上、イングランドのあらゆる資産、あらゆる土地、あらゆる貴重な品々とすべての官職任命件を所有しています。一方、私たちの階級は結婚によってではなく、生まれつきの権利によって、實際上、イングランドに何の資産も、土地も、貴重な品も、官職任命権も持っていません。このような相違が精神と身体のかんりの相違を生み出すことを心理学者も生物学者も否定はしないでしょう。そこで議論の余地のない事実として、「私たち」(we)——「私たち」という言葉にこめる意味は、記憶と伝統に影響されている身体と脳と精神からなる統一体なのですが——はいくつかの本質的な点で「あなた方」とは今でも異なっているに違いないということになると思われます。「あなた方」の身体、脳、精神はこんなにも異なる方法で訓練され、記憶と伝統によって、こんなにも異なる影響を受けているのですから。私たちは同じ世界を見ていますが、それを異なる目で見ているのです。(Three Guineas, 174-76)

異なるバックグラウンドを持つ男性と女性にとっては、当然、「愛国心」(patriotism)に関しても、両者が同じ見解を持つことの不可能であると指摘する。例えば、ある男性(Lord Hewart)が会合で行った「イングランド」への祝杯の挨拶を引用する。そこでは、イングランドの学校や大学で教育を受け、恩恵を受けてきた英国人(Englishmen)が、「自由」の敵を目の前に

して、「自由」(の女神)が住み給うイングランド、英国人のふるさと(Home)たるその城(castle)を守るのは当然であると論じられる。

それに対し、「わたし」は、男性たち (the educated man) には、この「愛国心」が理解されても、その姉妹たち (the educated man's sister) には、ここで言われている「愛国心」が自分たちにとって、いくばくかの意味を持つのだろうか、自分たちは、イングランドを誇りに思わなくてはならない理由が、ましてやイングランドを守らなくてはならない理由があるだろうか、そもそもイングランドにいて、これまでそれほど恵まれてきただろうか (Has she been greatly blessed in England?) と同じ階級の男性と女性を比較している。(Three Guineas, 161-62)

女子学生のためのコレッジ再建をサポートするにあたり、「わたし」はその「若くて貧しい」コレッジが、男性たちの「古く、伝統的で、豊かな」コレッジとは異なる教育を試みるように願う。この「わたし」が提案する「若くて、貧しい」コレッジのアイデアは、教育に携わるものとして大きな共感を呼ぶ部分である。古いコレッジの歴史や伝統が戦争を惹き起こす体質作りに大いに貢献していたことが明かされる。

さて次に新しいコレッジ、貧しいコレッジでは何が教えられるべきでしょうか。他の人びとを支配する技術ではありません。統治したり、殺したり、土地と資本を獲得する技術でもありません。それらはあまりに多額の諸経費、給料や制服や儀式を必要とします。…この新しいコレッジ、安上がりなコレッジのめざすものは、分離し専門化することではなく、むすびつけることなのです。それは心と身体を調和させる方法を探るでしょう。新しい結合が人間の生活にどんなよい統一体をもたらすかが明らかにされるでしょう。…古いコレッジは紛争の都市、こちらでは鍵をかけ、あちらでは鎖でくくりつける都市で、チョークの印を逸脱しないように、おえら方の気を損ねないように、誰も自由に歩いたり、自由に話したりできない場所なのです。しかしもしもコレッジが貧しかったら、差し出すものは何もないでしょうし、競争も廃止されることでしょう。人生は開放され、気楽なものとなるでしょう。学問そのものを愛する人びとは、喜んでそこにやってくるでしょう。…」(Three Guineas, 1938, 199-200)

古く、伝統ある教育、政治、法律、宗教、そして軍隊のシステムにおける儀式と衣装の象徴性については、実際に華美な衣装を身につけた男性たちの

写真を挙げ取り上げ論じられる。



図版1：雑誌『パンチ』による女性弁護士に対する風刺画（左）と実際の姿（右）（Causeより）

「まず始めにあなた方の衣服には驚いて、開いた口がふさがりません。公的な役割を果たしている教育を受けた男性が着ている衣服は、なんとたくさんの種類があつて、なんとも立派で、ここぞとばかりに飾りたてられていることでしょう！」（*Three Guineas*, 177）

普段の比較的地味な服装に比べ、なぜ儀式では大層なふるまいと衣装が必要とされるのか、その色、刺繍、リボンや縁飾り、宝石や毛皮の装飾が意味するものは何なのかが検討され、それらが食料品店の商品一つ一つにつけられた「品質保証」のように（"as the tickets in a grocer's shop"）、彼らの知的な、そして職業的な「地位」を宣伝するものであると述べている。（*Three Guineas*, 179）ストレイチーも『大義』の中で、社会進出を果たした女性がこうした衣装を身につけることに対して、社会がどのように揶揄しているかを取り上げている。（図版1）一方ウルフは、そうした華美な衣装が象徴する「地位を宣伝する」機能を暴き、それを必要とするシステムそのものを揶揄していると言えるだろう。さらにウルフは、これら華美な衣装をつけた男

性たちの写真に、スペイン内戦の悲惨な状況を伝える崩壊した家と死体の写真を並置することによって、一見、何の関連もないように見られるこれらの写真が実は結びついていることを明らかにする。衣装や飾りによって、また自分の名前の前後に肩書きや学位を表す文字をつけたりすることによって、地位や能力を宣伝することは、競争と嫉妬を書き立てる行動である。そしてもしそのような「榮譽」の印を必要とする「学問」やシステムを軽蔑する態度を表明するならば、戦争を引き起こす感情を防止することにつながるのではないかと提案する。(Three Guineas, 179-81)

軍事化とジェンダーの関連について提言を行っているシンシア・エンローが『3ギニー』について指摘しているように、多くのイギリス人たちが誇る、法律、大学、市民的奉仕、中産階級の洗練の中に、軍事主義を促進する要素が存在することにウルフは気づき、それらをユーモラスな形で暴いている。同時に、この第一次世界大戦後から第二次世界大戦にかけて、私的な領域から社会へと進出しはじめ、経済的自立を手にした女性たちが、今度は自分たちも、そうした軍事化を進めるシステムの一員となっていくことに危機感を感じ、警告している。(エンロー 214) ウルフは、教育、就職の場で、困難な状況に置かれている女性に対して、そしてその女性たちをサポートしようと懸命になっている組織に理解を示している。また私的な領域に限られた教育、また父、兄弟、夫に依存する生活を継続しているのでは、戦争を防止する上で何ら効力を持たないことも理解している。しかしながら、華美な衣装のお偉方の行列、官庁街へと足早に急ぐ男性たちの行列を目にし「わたし」は、今一度立ち止まり考えることを提案する。

「私たちがこの移行の時に、あの行列についてたずね、答えなくてはならない問いは、非常に重要で、その問いがあらゆる男性と女性の生活を永久に変えることがあるかもしれません。と言うのは、今、ここで、私たちはあの行列に加わりたいか、加わりたくないかを自分自身に尋ねてみなくてはならないからです。どのような条件であの行列に加わりましょうか。何よりもまず、あの教育を受けた男性たちのあのような行列は、私たちをどこに導いていくのでしょうか。」

(Three Guineas, 242-43)

「わたし」が女性の就職を支援する協会を支援するにあたり提案したこと以下のことであった。職業の実践において、「貧困」から解放され自立できること、十分暮らせるならば自分の知力を売ることをあきらめる「貞潔さ」

(chastity) を持つこと、そして勲章や称号で自分の能力を評価しようとする輩には「嘲笑」(derision) を投げつけること、国家や大学など自分の所属に対する「本物ではない忠誠心」から自由であること (freedom from unreal loyalties)、そしてこの協会が、性別、階級、人種や民族に抛らず、ふさわしい資格を持った人ならばどんな人をも支援することという条件で寄付に応じた。女性たちが職業に参加しても、職業に汚されないよう (uncontaminated)、また彼女たちが職業から、「非人間性」(inhumanity)、「獣性」(beastliness)、恐怖 (horror)、戦争の愚かしさ (folly of war) を取り除くことを願っての行為であった。その寄付された1ギニーは、家々を燃やすためではなく、その窓を明るく照らすことへとつながって欲しいとの願いをこめて。(Three Guineas, 269-75)

終わりに：爆撃を聞きながら

ストレイチーの『大義』は、イギリスの女性史における、教育や職業の場での問題点と改善への試み、参政権獲得までの流れを丹念に追った記録であるが、女性の「戦時労働」に関して、また女性が進出していこうとする社会の構造についてはまだ批判的に考察されていないようだ。一方、『3ギニー』では、女性の教育、職業の必要性を支持しつつも、「戦争」に関しては一貫して「アウトサイダー」であることが提案される。その努めは、武器を持たないことはもちろん、「理性」を持って一切を無視することである。それは負傷者を目にしたときにさえ、一切の介護の手を差し伸べないという完全な「無関心」(indifference) の態度である。そして「祖国」をさえ、その「祖国」が歴史と伝統の中で「女性」をどのように扱ってきたかを考え、「女性」という立場から「理性」的に見るのが求められる。もし「祖国」が自国の優位性を主張するならば、「理性」を持って、他国の歴史や文化をも学び比較・検討してみる。(Three Guineas, 309-14) 男性たちが、戦争と軍隊について、それは「職業」(profession)であり、「幸福と興奮の源泉」(a source of happiness and excitement)であり、それがないと人間が衰えてしまう (deteriorate)、「男らしさのはけ口」(an outlet for manly quality) なのだというレトリックを使って戦争を推し進めるならば、そこから排除されている「女性」という立場を逆手に取って、理性的に考えることを提案しているのである。(Three Guineas, 160)

ウルフの「空襲の中で平和について思う」("Thoughts on Peace in an Air Raid" 1940) というエッセイではまさに頭上に空襲の音を聞きながら、それでも「平和」について「冷静な、そして一貫した」("cool and consecutive")思

考を維持することの難しさ、そして重要さについて述べている。<sup>(15)</sup> 一方は「自由」を守るために戦うイギリスの若者たち、一方は「自由」を破壊しようとするドイツ兵たち、そして地上で飛行機の低いなり声を頭上に聞きながらベッドに入るイギリスの女性たち。男性と女性は、そのジェンダーにより、空と地上という二分された空間の中に分類されている。そして、武器を携帯することは原則として認められず、政治的にも軍事的にも意思決定の場に立つことはない女性たちが、平和のためにどのような戦いに臨めるのかを模索している。ここでは、ドイツからの空襲という、まさに「理性」を失わせるような状況の中で、「祖国」が主張する「自由」——ガスマスクを用意しながらベッドに引きこもる生活が「自由」なのだろうか——とは何かを考察する。「ヒトラー」とは誰なのか。権力への愛、他を奴隷化する欲望こそが「ヒトラー」であり、それを破壊することなしに「自由」はありえない。頭上で飛行機を駆る男性たちにも、ショーウィンドウに映るきれいに化粧をした女性たちの中にも圧制と横暴を愛する無意識の「ヒトラー主義」(subconscious Hitlerism) は潜んでいる、と「祖国」の中に潜む「ヒトラー」の存在を指摘する。<sup>(16)</sup> ここでもまた、愛よりも「名誉」へと傭兵「オセロ」たちを駆り立てるものは、「本能」("instinct") であるように表象されている。しかし、男性たちが「本能」と呼ぶものは、実は競争と、そこで勝ち抜く「栄光」を尊ぶ教育と伝統が育むものであるのだというウルフの示唆は、『3ギニー』にも共通する。

エンローやリン・ハンリーなどにより、実際は、女性が組織を非軍事化するよりも、遥かに早い速度で女性が「軍事化」する、あるいは「軍事化」に貢献するようになることが指摘されている現在、ウルフの平和維持に向けられた主張は消極的に感じられるかもしれない。ハンリーが指摘するように一旦戦時になれば、もちろん敵は、男性、女性という性に依らずに攻撃してくるであろう。(ハンリー, 74) 戦時下にあって「アウトサイダー」の立場を維持し続けることは極めて困難である。ウルフがイギリスの若者たちを救うために必要なのは、武器による戦いではなく、流れ (the current) に逆らう精神の戦い (mental fight) だと主張したが、戦時においてその戦いがどれほどの効力を発揮できるのか。("Thought on Peace," 244) だからこそ、現在、享受できる「豊かさ」や「機会」について、無批判にそれらを受け入れる危険性について考えること、広く軍事化に関する表象やレトリックを読み解く作業を続けることが一層重要であると考ええる。



## 註

- (1) 拙説「工場と戦場における女性：第二次世界大戦下のイギリスにおける女性の戦時奉仕」、「イギリスにおける『ガールガイド』運動：20世紀初頭の"girl"をめぐる言説」をさす。尚、本稿では便宜上、「イギリス」という呼称を使用する。
- (2) 日本英文学会 第79回大会 Symposia 第4部門「国際政治の中の20世紀イギリス」司会 太田信良、他（2007年5月19日、於 慶應義塾大学三田キャンパス）
- (3) 今井けいによると、イギリスの女性運動は、女性の精神的優位、家庭重視を説く「独自派」、男性と同じ権利、特に高等教育を女性にも解放するよう求めた「平等派」、労働運動を中心として展開した「社会派」に大きく分類できる。最初のものは、主に福音主義のキリスト教関連のグループ、青踏派が中心となり展開していたが、やがて女性の社会進出、性の二重規範の廃止を訴えるようになる。（今井4）二番目の区分で代表的なのは、フランス革命に刺激され『女性の権利の擁護』を執筆したメアリ・ウルストンクラフトである。
- (4) ストレイチャーの著書、21章The Death of Mrs Grundyでは、第一次世界大戦後の女性たちの「進歩」が取り上げられている。Mrs（あるいはMr）Grundyとは、Thomas Mortonの劇、*Speed the Plough* (1798)に由来し、ヴィクトリア朝的な世間体やしきたりに口やかましい輩、あるいは世間一般の比喻として定着した。19世紀における女性に関する因習についてはMartha Vicinusの研究が詳しい。
- (5) 1ギニー＝21シリング（1シリング＝12 ペンス）。これは専門職（弁護士）の男性がそれぞれの仕事の一回分の報酬に値する。因みに女性が一般的に一回分の仕事で受け取る報酬は6シリングであった。
- (6) フォーセットらの参政権運動は、「穏健派」と呼ばれ運動員は、「サフラジスト」(Suffragist) と呼ばれた。一方、パンクハースト夫人を中心とした運動はラディカルで「サフラジエット」(Suffragette) と呼ばれた運動員たちは、その暴力的行為のため投獄されることもあった。参政権運動、労働運動に関しては、Cheryl Law、Lucy Middletonも参照。
- (7) *Autobiography of Harriet Martineau* (Vol. 1, 1985) Harriet Martineau (1802-1876) 文筆家、ジャーナリスト。特に経済、労働、女性問題に関して多くの著作を残す。
- (8) ウルフの『3ギニー』については、出淵敬子訳を参照にし、筆者が適宜補足したものを使用。
- (9) V.A.D.は、主にミドル、アッパーミドルクラスの女性たちが中心になり活動していたようである。戦時労働でも看護は比較的历史の長い分野であるが、当時すでにThe Army Nursing Service、The Territorial Forces Nursing、Queen Alexandra's Military Nursing Service、Naval Nursing Serviceが活動していて、これらの組織にも労働を提供したい女性たちが殺到した。その他に、Hospital Supply Depotsは、救急車の運転、医療器具の提供などを行った。（Strachey, 339）
- (10) "dilution"（「代替」）とは、男性の出兵にともない、男性の熟練労働者に代わり、若い非熟練労働者、女性労働者を導入し、労働力を「薄める」(dilute) ことからきている。
- (11) その他にもThe Women's Royal Naval Service、The Women's Royal Air Force Service、The Army Pay Office、The Remount Department、The Anti-Gas Department、The Forage Corps① The Army Records、The Army Service Corpsに150000人の女性が働いた。そのうち、10分の1程度がフランスに駐留した。彼女

- たちは自分たちがThe British Armiesであると認識していたようだ。(Strachey, 345)
- (12) The Land Armyに関しては、拙説、「工場と戦場における女性：第二次世界大戦下のイギリスにおける女性の戦時奉仕」を参照されたい。
- (13) 「余った女性」(surplus woman)とは未婚女性のこと。19世紀では、特に紳士階級の娘たちにとって「結婚」がほとんど唯一の生活手段だったため、戦死、植民地への男性の流出の影響は深刻だった。川本静子、『ガヴァネス』を参照のこと。
- (14) ウルフの『自分だけの部屋』については、川本静子訳を参照にし、筆者が適宜補足したものを使用。
- (15) *The Death of the Moth and Other Essays*所収。
- (16) ウルフの作品と戦争、ファシズムとの関連については、Lavenback、Pawlowskiを参照。

Enloe, Cynthia. 上野千鶴子・佐藤文香訳 『策略：女性を軍事化する国際政治』(Maneuvers: The International Politics of Militarizing Women's Lives 2000) 東京：岩波書店、2006年。

今井けい『イギリス女性運動史』 東京：日本経済評論社、1992年。

Hanley, Lynn. 三木のぶ子訳「湾岸戦争のなかの女たち」『インパクション』(1992年4月) pp.72-75.

川本静子 『ガヴァネス』東京：みすず書房、2007年。

Lavenback, Karen L. *Virginia Woolf and the Great War*. Syracuse: Syracuse UP, 1999.

Law, Cheryl. *Suffrage and Power: The Women's Movement 1918-1928*. London: I.B. Tauris, 1997.

Marwick, Arthur. *Women at War: 1914-1918*. London: Fontana, 1977.

Middleton, Lucy. *Women in the Labour Movement: The British Experience*. London: Croom Helm, 1977.

武藤浩史 編 『愛と戦いのイギリス文化1900-1950』 東京：慶應義塾大学出版会、2007年。

Pawlowski, Merry M. *Virginia Woolf and Fascism: Resisting the Dictator's Seduction*. London: Palgrave Macmillan, 2001.

Strachey, Ray. *The Cause: A Short History of the Women's Movement in Great Britain*. London: G.Bell and Sons, LTD, 1928.

杉村使乃 「工場と戦場における女性：第二次世界大戦下のイギリスにおける女性の戦時奉仕」『敬和学園大学研究紀要』 第15号 (2006年3月)、167-187頁。

——。 「イギリスにおける『ガールガイド』運動：20世紀初頭の"girl"をめぐる言説」『新潟ジェンダー研究』 第6号 (2006年2月) 63-70頁。

Tullberg, Rita McWilliams. *Women at Cambridge*. Cambridge: Cambridge UP, 1998.

Vicinus, Martha, ed. *A Widening Sphere: Changing Roles of Victorian Women*. Bloomington: Indiana UP, 1977.

—, Ed. *Suffer and Be Still: Women in the Victorian Age*. Bloomington: Indiana University Press, 1972.

Woolf, Virginia. *The Death of the Moth and Other Essays*. London: Harcourt Brace, 1970.

—, *A Room of One's Own and Three Guineas*. Oxford: Oxford UP, 1998.